遺跡学フォーラム 行政情報

安満遺跡公園、全面開園

AMA SITE PARK WAS OPENED ENTIRELY

鐘ヶ江 一朗（高槻市街にぎわい部文化財課）
KANEGAE ICHIROU
(TAKATSUKI CITY OFFICE LIVELY TOWN DEPARTMENT CULTURAL PROPERTIES DIVISION)

1．はじめに

2021年３月27日、13ヘクタールの史跡安満遺跡を中核とする22ヘクタールの都市公園、安満遺跡公園が全面開園した。ＪＲ・民鉄とも駅から10分内外にあって市街地にのこる広大なオープンスペースを、遺跡を保存活用しつつ地域防災力向上に貢献する緑地公園にしようと、足掛け15年を要した市を挙げてのプロジェクトが結実したことになる。

ここには、遺跡発見の契機となった京都大学農学部の農場があった。市は、逐次市議会の特別委員会にも諮りながら検討を重ね、2008年には大学に対し、農場は新天地へ移転し、その跡地を芝生公園とする協議への参加をうながした。

のちにＵＲ都市機構も加わって三者協議は順調にととのい、翌2009年、大学は高槻農場を市へ売却してＵＲが造成する新農場へ移転し、跡地は史跡指定地を市が直営で史跡公園に、その余はＵＲによる直接施行で防災公園に整備するという大枠合意に至った。そこで最大の課題は、1993年の北側農地の史跡指定以来、農場自体は未告示史跡の状態にあったことだ。

2．安満遺跡の調査と保存

安満遺跡の発見は1928年、農場開設工事で弥生土器が出土し、京都帝国大学考古学教室による発掘調査が行われたことによる。このとき出土した土器の研究から、北部九州に成立した弥生文化が近畿に伝播したことが明らかにされた学史上知られた遺跡である。

1960年代後半から農場周辺の緊急調査や農場内の範囲確認調査が重ねられ、淀川北岸の三島地域で最も早く米作りが行われた環濠集落跡であり、生活の場である「居住域」、水田が営まれた「生産域」、方形周溝墓が群集する「墓域」という、集落を構成する３要素とその変遷が明らかになった。遺構・遺物の遺存状態も良好で、淀川を介した広範な交流を証する土器や石材

図１　東から見た安満遺跡公園　墓域上空から西の居住域・生産域を望む（画面中央左は１次開園エリア）　遺跡保存の最大の功労者は、官営鉄道との間に住宅街を構想し大阪医大と京大農場を誘致した、1920年代の民営電鉄のプランナーだと気付かされる

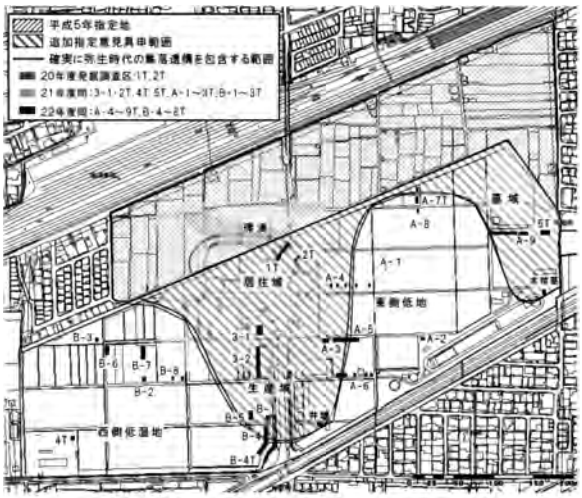

図２　範囲確認調査に基づく遺構の分布と追加指定範囲
西側低湿地・東側低地とも包蔵地として扱うことはいうまでもない

等の移動が確かめられている。

こうしたことから、「弥生時代の「クニ」の変遷過程を明らかにできる、極めて重要な大規模遺跡」であるとして指定妥当の答申を得、地権者同意を得た農場北側の約6.7ヘクタールが先行指定された。しかし農場は、教育研究活動に制約を受ける懸念から指定同意しないままに推移していた。そのため公園化検討の段階で追加指定につき文化庁と協議の結果、改めて農場内の範囲確認調査を行い、重要遺構の分布範囲を把握して史跡追加指定を目指すこととなった。

確認調査は調査指導検討会の指導助言を得て農場全域を対象にボーリング調査や地中電波探査も併用してトレンチを設定。2008～2010年の３か年実施した。その結果、弥生時代前期の環濠を４条確認し、出土土器の時期差から環濠拡大の様子が分かってきたほか、低湿地に突き出た舌状微高地に居住域、その縁辺部に用水路を伴う水田が存在するなど、微地形をとらえ稲作開始期の集落景観をうかがう成果を得た。

そして2011年３月には農場内6.37ヘクタールが史跡追加指定を受け、史跡事業と防災事業の範囲が定まった。が、整備への道のりは一本道ではなかった。

防災部分の上面利用が未確定であるとして、市が上程した防災事業関連議案が９月議会で継続審議となり、12月議会で議案取下げののち、概ね２か年をかけて上面利用を検討することを約して2012年３月議会に同議案を再提出。議決を得て、ようやく市とＵＲの作業が本格始動した。新農場への移転計画に基づく用地取得の実務を進める一方で、外部委員を交えての公園整備構想―もはや当初の動機であったサッカースタジアム誘致には縛られず、用地の個性と立地特性を重視したセントラル公園―検討に取り組んだ。

３．安満遺跡公園整備構想

公園・考古・防災の専門的指導を得て策定した整備構想の大きな特徴は、都市公園では画期的なハーフメイド（施設をつくりこまず成長の余地を残す）に踏み込んだことにある。理念と目標像を掲げておこう。

都心にある／史跡安満遺跡と京大農場跡地の／歴史・環境資産を活かし／豊かな市民生活の発展と／新たな市民文化醸成の拠点として／高槻市のシンボルとなる／市民共有の公園を／市民とともに育てつづける

目標像①歴史資産の保存と活用、②地域防災力創生の場、③緑豊かな景観・環境の創出、④成熟化社会に向けた公園、⑤高槻版市民が育てる公園づくり

⑤については、構想策定時から市民活動グループの育成と協働に取り組んだ。公園全体の造成レベルは史跡エリアの旧地形に基づいて設定。パークセンター、駐車場などの集客・便益施設は防災エリアに集中させ、両エリア共通のカラーコードも設けた。

整備構想を受けて、史跡エリアは基本計画、基本設計、実施設計と進め、防災エリア（西）はＵＲが実施設計を行う一方、同エリアに先行建設される雨水貯留施設等の事前調査を行った。調査では、洪水砂の下から前期の小区画水田が極めて良好な状態で発見された。

図３　前期の小区画水田　洪水堆積で放棄された後は木棺墓や方形周溝墓が営まれていた。後方は移転前の農場

１枚15～60㎡の水田を57枚確認、足あとも多数検出した。雨水貯留施設は位置変更が決断され、貴重な水田遺構は埋め戻し保存が図られている。その後も防災エリア（西）では施設建設に先立つ調査を実施ののち、公園工事が行われ2018年３月に一次開園した。

４．遺構の保護と表現

史跡エリアでは地形復元を兼ねる保護盛土のうえ、環濠、水田、方形周溝墓をそれぞれ遺構表示した。地被植栽はノシバを基本に、一部はチガヤを採用した。

環　濠　前期末の環濠を対象に、環濠自体は白石を敷き均して平面表示し、外側に人工芝の土塁を巡らせた。鉄道からの眺望も意識して、夜間は白石の環が浮かび上がる。入口は未発見であり、公園のメイン動線上に入口を設定した。

水　田　西側で検出した小区画水田の様相に基づいて、南側に地形に沿った形で体験水田を整備した。水稲の栽培中は畦畔が隠れてしまうため、サブ動線に沿って固化土でモデル水田を造形した。

方形周溝墓　東部方形周溝墓群の西端の六基を盛土復元し、表面は固化土で仕上げた。1969年の確認調査で出土した木棺は実大の写真陶板で原位置の上面に展示した。

サイン・モニュメント　サイン類は文章を極力抑え、復元イラストを中心に10か所設置した。メインのガラ

図４　居住域遺構表現
左）メインエントランス近景
　環濠白石表示、人工芝土手、
　史跡名称板（大）、門柱
上）門柱上の鳥

図５　生産域遺構表現
左）体験水田とモデル水田銅鐸形
　灯具、鋤モニュメント
上）農具モニュメント(同)

図６　墓域遺構表現
左）方形周溝墓群盛土復元
上）木棺写真陶板表示

図７

左）墓域シンボル
北摂型広口壺
ＧＲＣ製、Ｈ3000㎜

右）ガラスサイン
強化ガラス t15×２
Ｈ1400×Ｗ6000㎜

スサインは、背後の山並みや復元環濠を背景に、当時の住居や情景イラストを見てもらう、いわばアナログＶＲだ。モニュメントは、出土した壺や農具などをできるだけ忠実にスケールアップし、エントランスや居住域、生産域、墓域のシンボルとした。

ガイダンス施設　中央にある本館は、二階の柱と桁を露出させたハーフティンバーという北・中欧の中世的な建築様式を基調に、当時流行の意匠も組み合わせた農園風の完成度の高い建築と評価されている。これら赤屋根・白壁の統一感ある木造近代建築４棟にガイダンス施設機能を担わせ、歴史拠点と名付けた。

本館はレストランと休憩室、その東側・環濠が直下を通過する展示館はハンズオン展示のギャラリーと映像シアター、西側・体験館は陶芸窯を備えた歴史体験室と多目的スペース、北館は野外活動を支えるバックヤード。現在、登録文化財への手続き中である。

５．今後の展望

史跡エリアを含め、安満遺跡公園は指定管理者による維持管理を行う。歴史拠点は通常無人。防災公園でもあるため、外周は低いロープ柵を巡らせ、建物以外は24時間無料開放。史跡エリアも安全・安心な空間づくりは先行する今城塚古墳「いましろ 大王の杜」以上に徹底した。

憩いや健康づくりを求めて来園する人々に、日常空間にある歴史の重層性を直感してもらえればと願う。

駅から徒歩10分の市街地にあって、整備地の広い空と原っぱは何物にも代えがたい。コロナ禍のため休止しているが、にぎわい創出に向けて青空イベントなどを積極的に誘致・開催していくことになるだろう。今後、公園の整備理念が試される。市民活動グループ・安満人倶楽部の本格始動に大いに期待している。そして史跡エリアでは「掘り続け深化していく」ため、資料蓄積に向けて公開発掘などを検討している。

（今城塚古代歴史館特別展図録「安満遺跡公園の整備」に加筆）

図８　上）歴史拠点全景
中）展示館シアター
３方の壁と床に映像を投射。２分×３番組＋インタラクティブ映像
下）展示館ギャラリー
土層転写＋ＦＲＰ造形の環濠模型、出土した生活用具の復元品を展示。復元品をカメラの前にかざすとＡＩ認識で用途や名称を教えてくれる「教えて長老」が人気だ

謝　辞

確認調査及び整備構想策定は工楽善通、井藤徹、福永伸哉、増田昇（公園）、越山健治（防災）の諸先生にご指導いただき、事業全般にわたり市史跡整備指導検討会並びに文化庁、大阪府教育委員会の理解と支援を得た。心から感謝申し上げる。

なお2019年８月の機構改革で、文化財課は教育委員会から市長部局に新設された街にぎわい部に移行した。